

IV 為弘 3 号墳の調査

1 墳 丘

為弘 3 号墳は、2 号墳の南南西約 25m のところにある（第 2 図）。第 24 図にみるように、尾根の稜線は北方向に伸びているのに、3 号墳はそれから少し西に外れて、崖に近い急斜面の縁に在る。1・2・4 号墳がいずれも稜線上に所在するのに、3 号墳がそれから外れるということは、それなりの社会的制約が存在したものと考えられる。

3 号墳も地表の盛土はすべて流失しており、露出していた石材 3 個は本来の位置から外れており（第 24 図）、調査の進行にしたがって除去した。この古墳の南から西側は急斜面となっており、北から東側は平坦ないしやや上っている。全体的にみて、古墳の造り難い地形であったと思われる。石室を構築する掘り方は浅く、50cm 足らずの深さであった。

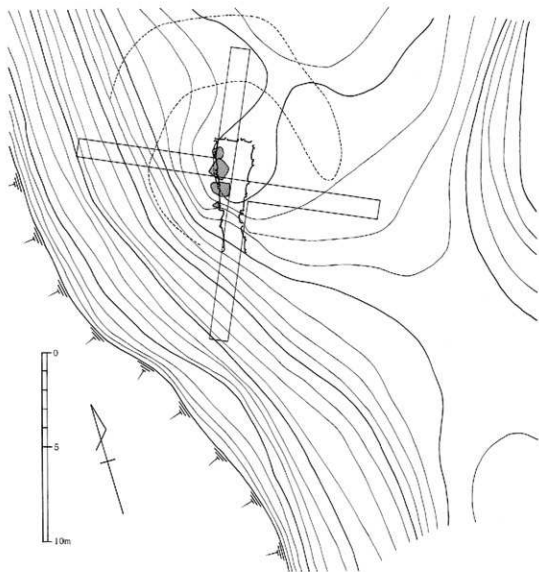
東トレンチの所見では、花崗岩の風化土である赤褐色土を削り除けて、黄白色の岩盤状の風化花崗岩（オニマサ）の上に盛土を始めている。西側は急傾斜で下がっているため、まず基壇状の平坦面を造成して、その上に直径約 9m の墳丘を築いている。北側も地山自体がゆるやかに上っていくのだが、幅 4～2m、深さ 0.4m の半円形状の周溝を巡らして塚域の区画と封土の供給を果たしている。南側は入口に当たる方向で、羨道は平坦に削った岩盤状の風化花崗岩の上に築かれているが、そこから南はかなりの傾斜で下っており、墓道を付けるとしたら相当困難ではないかと思われる。トレンチによる墳丘の断面観察では明瞭な版築はみられず、土を投げ込みながら盛り上げていった様子が伺える。墳丘の高さを石室の復元値から推測すれば、墓道から見て 2.5m 程度であったと思われる。

この古墳群の調査では墓道を検出することはできなかったが、2～4 号墳の場合は、古墳群が乗る尾根裾の西側に沿って古い山道が通じており、そこから枝分かれして 2 号墳と 4 号墳のあいだの小さな鞍部に登る小道が付いていた。多分これが古墳時代から続く山道であり、墓道であったと考えられる。それが正しいとすれば、3 号墳の場合は羨門部から 120° 程度東に折れて鞍部に通じる墓道が付いていたのではないかと思われる。

2 埋葬施設

為弘 3 号墳の主体部は、南に開口する羽子板形の平面プランをもつ横穴式石室である。主軸方位は上位にある 2 号墳のものにほぼ並行しており、類縁性を感じさせるが、石室の平面プランが長方形と羽子板形の違いがある。3 号墳も破壊されており、大部分は基底部 1 段の石材を残すのみであったが、奥壁部西側においては、ほぼ天井に達すると思われる高さまで石組が残されていたので、平面形や立面形のあらましを復元することは可能である。

玄室は主軸線での長さ約 3.6m、奥壁部での幅約 1.7m、玄門部での幅約 1.2m。羨道は西側の側壁が少し短い、それで完結している状況であるので、中軸線で計れば約 2.1m、幅はやや開き気味で、玄門部で約 0.8m、羨門部で約 1m。石室全長は合わせて 5.7m である。玄室内法の高さは、奥壁部の残存する石組の高さから測って約 1.9m であるので、およそ 2m には達したであろうと思われる。

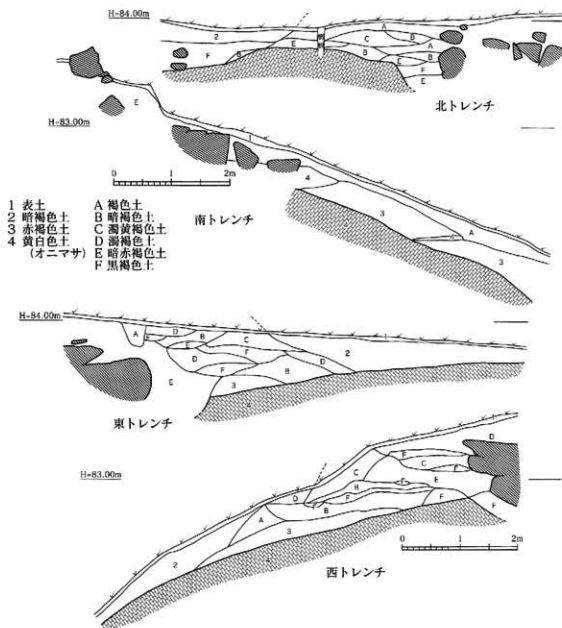


第24図 為弘3号墳墳丘測量図

奥壁の基部には、通例と異なって、羨道を含めた両側壁基部の石材より小型で形も整わない縦長の板状石材を3枚並べている。その上には大小の石材をお互いの長短を埋め合わせながら、乱雑に積み上げている。東側壁では基部1段の石材しか残っていないので確言できないが、西側壁の一部についていえば、基部の石材が特に大きく形も整っているというわけではなく、奥壁と同じように大小の石材を組み合わせているものと推察できる。また通例と異なる点は、羨道部両側壁の基部石材が玄室基部の石材に比べて同じか、むしろやや大きめであることである。玄門部には西側で約25cm、東側で約20cm中へ入れて石を立て、両袖を造っている。なお羨門部に閉塞石材が一部残っていた。

3 出土遺物

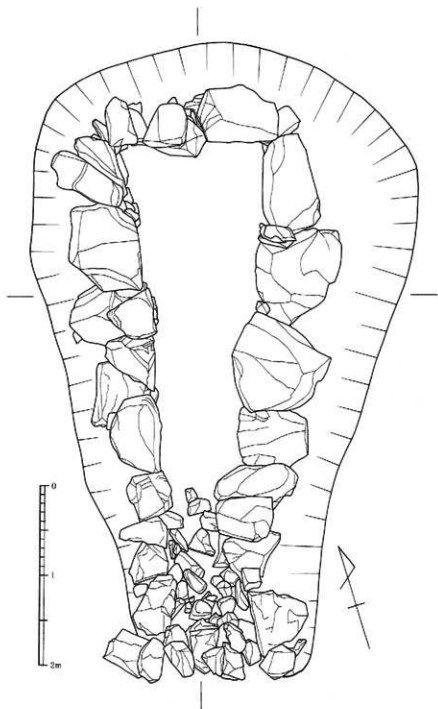
為弘3号墳も墳丘を殆ど失っており、周辺から弥生土器と須恵器片の出土をみたが、弥生土器については次章で扱い、須恵器は図化できない破片であった。



第25図 為弘3号墳トレンチ断面実測図

出土状況 (第28図) 土器は須恵器も土師器も、石室の主軸線に沿って出土しており、強いていえば玄門寄りにいくらかの集中がみられる程度である。耳環3個が石室中央の南西約40cmの所に重心を置いて、1辺60～70cmの三角形の各頂点の位置で出土した。鉄製品は羨道部を含めた石室全体に散らばって出土しているが、土器の分布と同様に玄門部付近に重心がある。

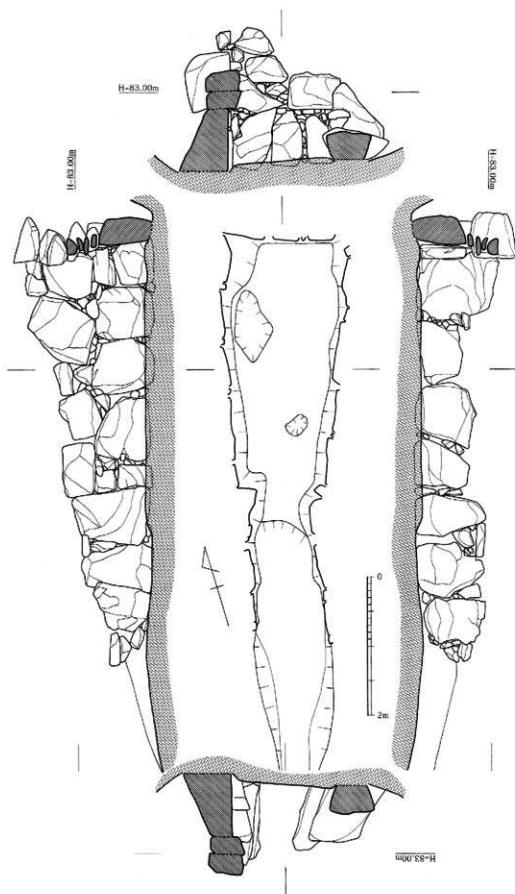
土 器 (第29・30図) 須恵器の坏類が蓋と身それぞれ10個ずつ出土している。殆どが小型化しており、これまでの例によって蓋の口径が130mm以下のものを小型とすれば、2個体が外れるだけで、残り8個体はすべて小型となる。その外れる2個体も133mm (第29図1) と 132mm (第29図2) であるから、すべてが小型化しているといっていよいと思われる。最小のもの (第29図10) は口径が105mm



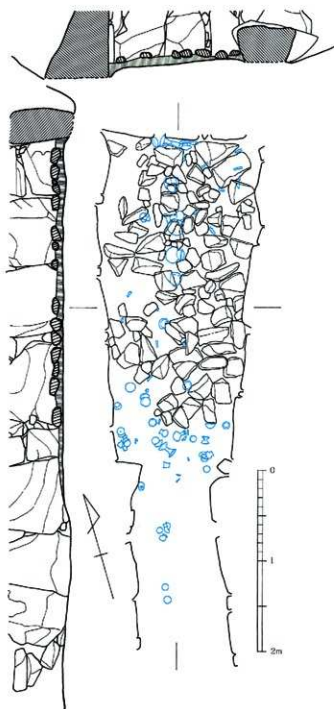
第26図 為弘3号墳石室上面観実測図

である。環身についても同じ傾向であるが、第29図17・18のように最大径が150mmを超える普通の大きさのものもあるが、10・11のように受部の消失したものや、第29図19（最大径123mm）・第29図20（最大径112mm）のような小型品が含まれる。これらの土器は7世紀中頃まで下るものであろう。

高杯は有蓋で長脚のもの1個体（第29図27）、低脚のもの2個体（第29図21・22）など古い様相を持つものを主としているが、第30図38は新しい様相を持つタイプと思われる。甕（第29図25）は頸部が縮まり、内径が8mm程度しかなく、体部の円孔を切り抜いた粘土が体内に落ち込んでいるが、それ



第27図 為弘3号墳石室平面立面実測図



第28図 為弘3号墳床面・遺物出土状況実測図

この古墳には本来玉類はなかったものと判断した。1は外径29.8mm、断面径7.6mm、重さ5.8g。2は外径24.8mm、断面径6.8mm、重さ5.5g。3は外径24.5mm、断面径6.5mm、重さ5.7gを計る。

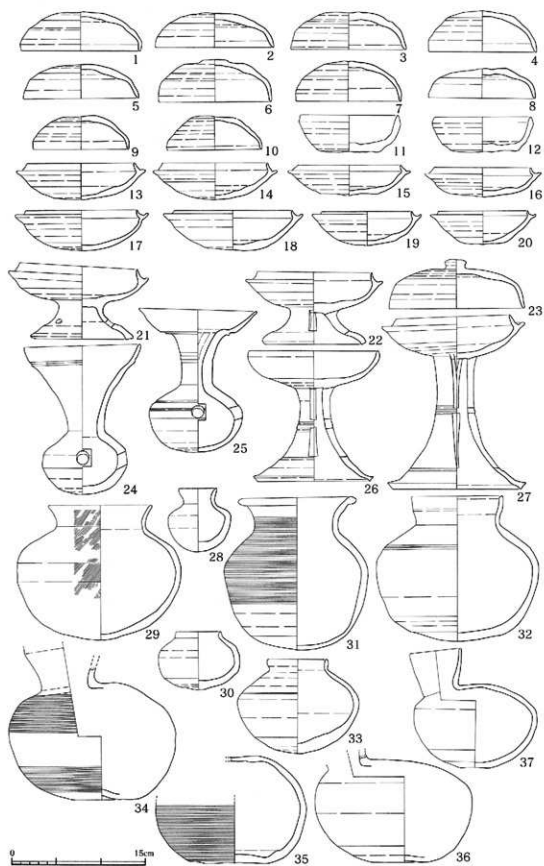
鉄製品（第33図） 大刀は見られず、出土状況から1口分と思われる小刀の破片を玄門部付近で検出した。刀子4口は玄室前半部から炭道にかけて、まとまりなく出土した。4が炭道部出土の刀子で、使い込まれて研ぎ減りしているように見える。6も炭道部から出土した有袋式の鑿または鑿と思われ

が取り出せず、そのまま焼きあげたので、鈴のように鳴る。またこの土器には体部に無数のひび割れがみられるので、陶器の実作者に聞いてみたところ、土練り不足と、不純物による「石ハゼ」などによる焼き傷とのことである⁽⁹⁾。器高6～7cmの小形壺がある。広口壺（第29図29）の口頸部から体部外面にはハケメとしか思えない調整痕が残されている。この古墳には提瓶がなく、平瓶が4個体出土しており、新しい様相を示すものと思われる。第29図37はほぼ完形で、口頸部横の天井部に小さな×印のヘラ記号（第31図13）が付いている。

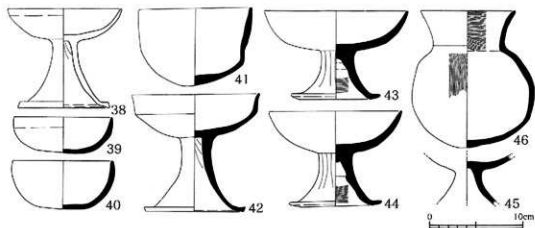
第30図39～46は土師器である。碗、高杯、広口壺などがある。これらの土器の個々の詳細は第5表に記載している。

ヘラ記号（傷） 為弘1～3号墳出土須恵器に刻印されているヘラ記号もしくはヘラ傷を集成している（第31図）。1～10は1本線、11・12は2本線、ただし12はヘラ傷とも思える。13・15は×、14は↑印が線刻されている。16は横線4本、縦線2本を井桁状に組んでいる。17は乱暴な刻線で、ヘラ傷かと思われる。

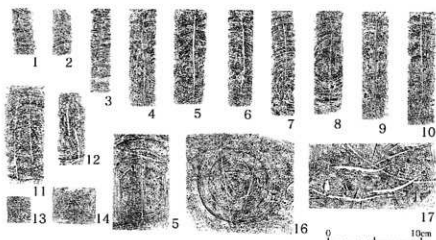
装身具（第32図） 銅芯渡金の耳環が3個出土した。玉類も埋存するものと想定して、排土まで丹念に調べたが、ついに1個の玉類も発見できなかった。



第29図 為弘3号墳出土土器実測図(1)

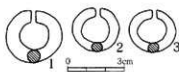


第30図 為弘3号墳出土土器実測図(2)

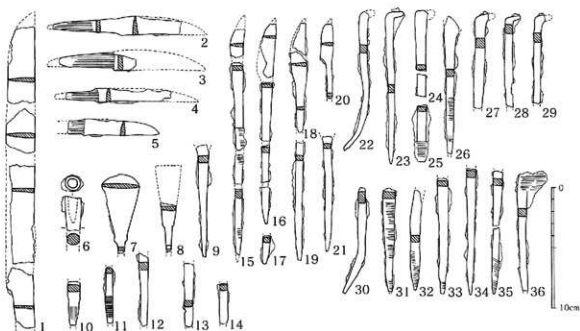


第31図 為弘古墳群出土須恵器のへら記号拓影（挿図番号-土器番号）

- | | | | | |
|------------|------------|------------|------------|------------|
| 1 (19-50) | 2 (19-47) | 3 (9-50) | 4 (9-6) | 5 (9-31) |
| 6 (9-35) | 7 (9-9) | 8 (9-34) | 9 (9-15) | 10 (19-29) |
| 11 (19-24) | 12 (9-5) | 13 (29-37) | 14 (20-65) | 15 (19-10) |
| 16 (19-24) | 17 (29-33) | | | |



第32図 為弘3号墳出土土環実測図



第33図 為弘3号古墳出土鉄製品実測図

るが、刃部を欠損しているので、全容は不明である。

7～21は鐵と思われる鉄製品である。鐵身には平根のものと尖根のものがある。尖根のものは片刃刀箭式のものである。11は鉄鐵の茎と思われるが、糸は残っていないものの、はっきりした緊縛痕が残っている。22～36は鉄釘であろうと思われる。完形品（23）の長さは126mmである。

注(9) 注(7)に同じ

第5表 為弘3号墳出土土器観察表

凡例 番号欄：下段の4桁数字は取り上げ番号 計量欄：受径は受部径、胴径は胴部最大径、裾径は脚部径
調整欄：常考欄：天は天井部、口は口縁部、胴は胴部、底は底部、脚は脚部

番号	器種	出土位置	計量 mm	調 整		色調	焼成	備 考
				外 面	内 面			
1 3026	坏 蓋	東袖部 隅	口径 133 器高 43	天 口 ヘラケズリ ヨコナデ	天 口 ナデ ヨコナデ	青灰色	良好	口縁端部は丸みを持つ 胎土に細砂を含む
2 3121	坏 蓋	西袖部 中寄り	口径 132 器高 38	天 口 ヘラケズリ ヨコナデ	天 口 ナデ ヨコナデ	青灰色	良好	口縁端部は丸みを持つ
3 3048	坏 蓋	西袖部	口径 129 器高 42	天 口 ヘラケズリ ヨコナデ	天 口 ナデ ヨコナデ	青灰色	良好	口縁端部は丸みを持つ 小型化
4 3092	坏 蓋	羨道部	口径 120 器高 46	天 口 ヘラケズリ ヨコナデ	天 口 ナデ ヨコナデ	灰 色	良好	口縁端部は丸みを持つ 胎土に細砂を多量含む 小型化
5 3081	坏 蓋	奥壁部 中央	口径 129 器高 38	天 口 ヘラケズリ ヨコナデ	天 口 ナデ ヨコナデ	灰 色	良	口縁端部は丸みを持つ 小型化
6 3118	坏 蓋	西袖部	口径 126 器高 47	天 口 ヘラケズリ ヨコナデ	天 口 ナデ ヨコナデ	灰 色	良	口縁端部は丸みを持つ 小型化
7 3184	坏 蓋	東袖部	口径 117 器高 45	天 口 ヘラケズリ ヨコナデ	天 口 ナデ ヨコナデ	灰白色	不良	口縁端部は丸みを持つ 胎土に細砂を含む 小型化
8 3124	坏 蓋	西袖部 中寄り	口径 119 器高 34	天 口 ヘラケズリ ヨコナデ	天 口 ナデ ヨコナデ	灰 色	良好	口縁端部は丸みを持つ 胎土に細砂を含む 小型化
9 3007	坏 蓋	東袖部 中寄り	口径 107 器高 38	天 口 ヘラケズリ ヨコナデ	天 口 ナデ ヨコナデ	灰白色	不良	口縁端部は丸みを持つ 胎土に細砂を多量含む 小型化
10 3113	坏 蓋	東袖部	口径 105 器高 38	天 口 ヘラケズリ ヨコナデ	天 口 ナデ ヨコナデ	灰白色	不良	口縁端部は丸みを持つ 胎土に細砂を含む 小型化
11 3041	坏 身	中央玄 門寄り	口径 108 器高 42	口 底 ヘラケズリ	口 底 ナデ	青灰色	良好	口縁端部は尖り気味 焼き膨れ顕著 胎土に細砂を多量含む 小型化
12 3043	坏 身	中央部	口径 107 器高 40	口 底 ヘラケズリ	口 底 ナデ	灰褐色	良好	口縁端部は尖り気味 胎土に細砂を多量含む 小型化
13 3133	坏 身	中央部 東壁際	口径 120 受径 144 器高 41	口 底 ヘラケズリ	口 底 ナデ	灰 色	良好	立ち上がりは短く内傾し、端部 は丸みを持つ 胎土に細砂を含む
14 3106	坏 身	東袖部 中寄り	口径 125 受径 139 器高 41	口 底 ヘラケズリ	口 底 ナデ	青灰色	良好	立ち上がりは内傾し、端部は丸 みを持つ 小型化
15 3034	坏 身	東袖部	口径 115 受径 150 器高 34	口 底 ヘラケズリ	口 底 ナデ	灰 色	良好	立ち上がりは短く内傾し、端部 は丸みを持つ 胎土に細砂を含む
16 3117	坏 身	西袖部	口径 108 受径 131 器高 33	口 底 ヘラケズリ	口 底 ナデ	青灰色	良好	立ち上がりは短く内傾し、端部 は丸みを持つ 小型化
17 3102	坏 身	東袖部 隅	口径 125 受径 151 器高 45	口 底 ヘラケズリ	口 底 ナデ	青灰色	良好	立ち上がりは短く内傾し、端部 は丸みを持つ 外面に自然釉付 着 胎土に細砂を多量含む
18 3087	坏 身	羨道部	口径 132 受径 156 器高 45	口 底 ヘラケズリ	口 底 ナデ	青灰色	良好	立ち上がりは短く内傾し、端部 は尖り気味 焼き歪みが大きい 胎土に細砂を含む
19 3111	坏 身	東袖部 隅	口径 101 受径 123 器高 38	口 底 ヘラケズリ	口 底 ナデ	灰白色	良	立ち上がりは短く内傾し、端部 は尖り気味 小型化
20	坏 身	墓 道	口径 100 受径 112 器高 37	口 底 ヘラケズリ	口 底 ナデ	灰白色	不良	立ち上がりは短く内傾し、端部 は尖り気味 胎土に細砂を多量含む 小型化
21 3080	高 杯	奥壁部 中央 隅	口径 132 器高 84 裾径 100	口 底 ヘラケズリ ヨコナデ	口 底 ナデ ヨコナデ	灰 色	良好	3方小円孔通かしを持つ八字状底 脚部に坏身部が乗る 立ち上がり は内傾する 胎土に細砂を含む
22 3093	高 杯	中央部	口径 128 器高 81 裾径 107	口 底 ヘラケズリ ヨコナデ	口 底 ナデ ヨコナデ	青灰色	良好	2方長方形通かしを持つ八字状底 脚部に坏身部が乗る 立ち上がり は直立気味 胎土に細砂を含む
23 3035	蓋	玄門部	口径 151 器高 55	天 口 ヘラケズリ ヨコナデ	天 口 ナデ ヨコナデ	青灰色	良好	擬宝珠つまみを持つ

番号	器種	出位置	計量 mm	調 整		色調	焼成	備 考
				外 面	内 面			
24 3067	甕	中央部 奥寄り	口径 129 胴径 95 器高 166	口頸 胴底 ヘラケズリ	口頸 胴底 ナデ	青灰色	良好	小円孔を持つ球形体部にラッパ 形の口頸部を付ける 胎土に細砂を含む
25 3038	甕	玄門部 中央	口径 131 胴径 101 器高 160	口頸 胴底 ヘラケズリ	口頸 胴底 ナデ	青灰色	良好	小円孔を持つ球形体部にラッパ形の口頸部を付 ける 体部外面にひび割れ・ヘラキズあり 内部 に円孔粘土の落ち込み 胎土に細砂を多量含む
26	高 杯	墓 道	口径 144 胴径 126 器高 145	口頸 胴底 ヘラケズリ	口頸 胴底 ナデ	青灰色	良好	2方2段方形透かしを持つ脚部に腕 形の杯部が乗る 脚部内面にシボリ 焼ききる大 胎土に細砂を多量含む
27 3034	有 蓋 杯	玄門部 奥寄り	口径 128 胴径 144 器高 193	口頸 胴底 ヘラケズリ	口頸 胴底 ナデ	青灰色	良好	2方2段方形透かしを持つ脚部 に杯身が乗る 脚部内面にシボリ メを持つ 胎土に細砂を含む
28 3091	小形壺	羨道部	口径 42 胴径 70 器高 70	剥落顕著 不明	剥落顕著 不明	灰褐色	不良	手握ねのミニチュア 胎土に細砂を多量含む
29 3066	広口壺	中央部 奥寄り	口径 114 胴径 185 器高 150	口頸 胴底 ヘラケズリ	口頸 胴底 ナデ	灰白色	不良	体部外面のハケメ状痕が残る 胎土に細砂を多量含む
30 3056	短頸壺	羨道部	口径 49 胴径 91 器高 64	口頸 胴底 ヘラケズリ	口頸 胴底 ナデ	青灰色	良好	球形体部に極めて短い口頸部が 直立する 胎土に細砂を多量含む
31 3065	広口壺	中央部	口径 121 胴径 161 器高 170	口頸 胴底 ヘラケズリ	口頸 胴底 ナデ	灰 色	良好	胎土に細砂を含む
32 3023	短頸壺	東袖部 隅	口径 100 胴径 183 器高 161	口頸 胴底 ヘラケズリ	口頸 胴底 ナデ	灰白色	不良	球形体部に短い口頸部が直立 する 胎土に細砂を含む
33 3031	短頸壺	西袖部 隅	口径 65 胴径 130 器高 101	口頸 胴底 ヘラケズリ	口頸 胴底 ナデ	灰白色	良好	球形体部に短い口頸部が直立す る 体部に深く長い乱暴なへう 記号ないしへう傷を持つ
34 3101	平 瓶	東袖部 隅	口径 188 胴径 168 器高 168	口頸 胴底 ヘラケズリ	口頸 胴底 ナデ	青灰色	良好	口頸部の一部を欠損 胎土に細砂を多量含む
35	平 瓶	南 トレンチ	口径 170 胴径 119 器高 117	口頸 胴底 ヘラケズリ	口頸 胴底 ナデ	灰 色	良好	口頸部を欠損 焼き膨れ多数 胎土に細砂を多量含む
36 3094	平 瓶	羨道部	口径 177 胴径 119 器高 119	口頸 胴底 ヘラケズリ	口頸 胴底 ナデ	灰 色	良好	口頸部を欠損 胎土に細砂を含む
37 3108	平 瓶	西袖部 隅	口径 52 胴径 138 器高 133	口頸 胴底 ヘラケズリ	口頸 胴底 ナデ	灰 色	良好	偏球形体部の端に直立する口頸部 を付ける 体部上面口頸部付近に へう記号 胎土に細砂を含む
38 3037	高 杯	玄門部	口径 122 胴径 98 器高 105	器表面剥落顕著 不明	器表面剥落顕著 不明	黄白色	不良	透かしを持たない脚部に腕形杯 部が乗る 脚部内面にシボリメを 持つ 土器器に近い焼成
39 3100	土 師 碗	玄門部	口径 122 器高 84	全面 ミガキ	全面 ミガキ	橙 色	良	胎土に細砂を含む
40 3049	土 師 碗	東袖部 中寄り	口径 106 器高 51	全面 ミガキ	全面 ミガキ	黄橙色	良	胎土に細砂を含む
41 3112	土 師 碗	東袖部 隅	口径 104 器高 38	全面 ミガキ	全面 ミガキ	黄橙色	良	胎土に細砂を含む 外面の一部に黒斑
42 3132	上 高 杯	中央部 東寄り	口径 136 胴径 104 器高 121	全面 ミガキ	全面 ミガキ	橙褐色	良	比較的丁寧なつくり 脚部内面にシボリメを持つ 胎土に細砂を含む
43 3072	土 師 壺	奥壁部 中寄り	口径 101 胴径 131 器高 145	口頸 胴底 ヘラケズリ	口頸 胴底 ナデ	黄褐色	良	体部外面に赤色顔料塗布 外面の一部に黒斑 胎土に細砂を含む
44 3025	土 師 杯	玄門部 東寄り	剥落顕著 不明	剥落顕著 不明	剥落顕著 不明	黄褐色	不良	
45 3051	土 師 杯	西壁部 際	口径 137 胴径 93 器高 75	口頸 胴底 ヘラケズリ	口頸 胴底 ナデ	赤褐色	良	脚部に暗文風のへう痕 内外面に赤色顔料を塗布 胎土に細砂を含む
46 3079	土 師 杯	奥壁部 中央	口径 140 胴径 75 器高 101	口頸 胴底 ヘラケズリ	口頸 胴底 ナデ	赤褐色	良	脚部に暗文風のへう痕 内外面に赤色顔料を塗布 胎土に細砂を含む

V 弥生時代その他の調査

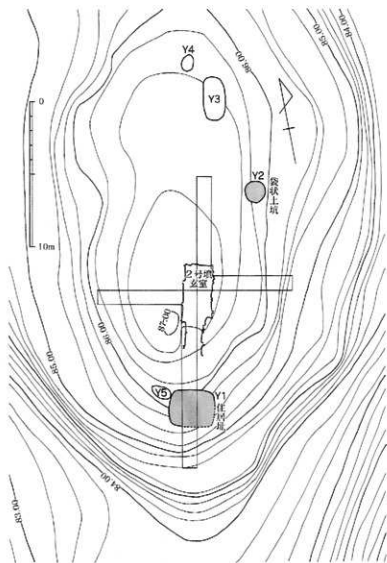
1 為弘弥生遺跡

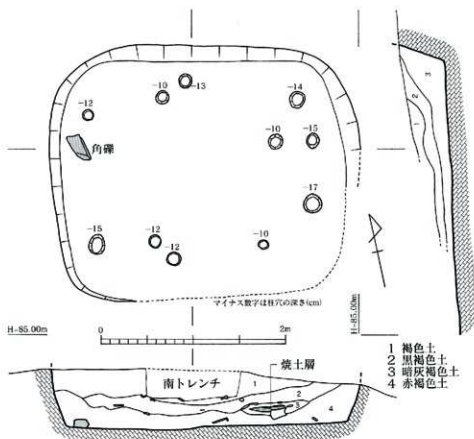
為弘2号墳の周囲には弥生中期後半の遺構が埋存していた。直接墳丘が被さっているものはないが層序的には墳丘の下位に当たる。2号墳の墓道に相当するところに竪穴住居址1基、裏側のやや東寄りに袋状土坑が1基、その他周辺には大小3基の竪穴が見つかった(第34図)。この周辺では小型の重機を使って、崖の縁まで広く表土を剥ぎ取り、遺構の検出に努めたが、溝をはじめ他には何も検出できなかった。

竪穴住居址(第35図) 床面で測れば、長軸が約3m、短軸が約2.5m、深さは最大で約0.6mの小型長方形の竪穴住居址である。柱穴は壁沿いに不規則に散らばった状態で見出し、直径はおおよそ10~20cm、深さは10~17cmであった。付近には他に柱穴はみられず、層位的にもこれらの柱穴はすべてこ

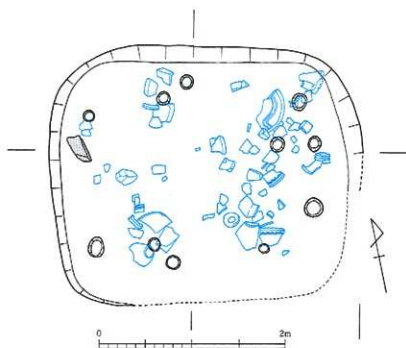
の住居址に所属するものと思われるが、合計11個の柱穴がどのように組み合っていたのか、立て替えの痕跡も見出せないなので、理解し難い。

1個の角礫が西壁に沿って床面に密着した状態で検出された。状況からみて、この住居址の備品の一つであろうと思われる。炉穴その他の設備はなく、レンズ状の焼土層が埋土のなかに浮き上がって見出された。遺物はすべて弥生中期後半の土器片で、床面に密着したものはなく、2~3層を中心に出土しており、平面的分布にも特徴はなく、土砂とともに投げ込まれた状態と思われる(第36図)。しかし全体的状況から推して、これらの土器片はこの住居址が廃棄される時点で極めて近い時期のものであることは間違いないであろう。

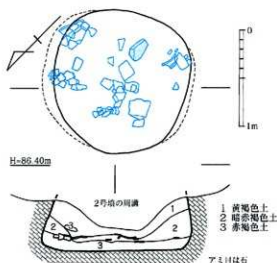




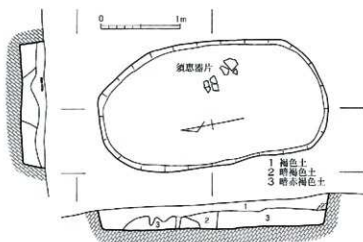
第35図 為弘遺跡住居址平面断面実測図



第36図 為弘遺跡住居址土器出土状況実測図 (平面)



第37図 為弘遺跡袋状土坑平面断面・遺物出土状況実測図



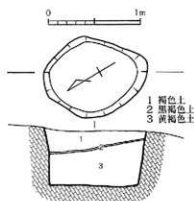
第38図 為弘遺跡土坑 Y 3 平面断面実測図

袋状土坑（第37図） 為弘2号墳の背後の周溝の底で検出したもので、上半部を周溝によって削り取られている。残存する平面プランは円形で、床面の直径が最大で1.6m、深さが約0.5mであった。復元しても深さはせいぜい1m程度の小型の土坑であったと思われる。床面は平坦で何の施設もなかった。遺物はすべて弥生中期後半から後期にかかる土器片で2層と3層の接触面を中心に出土した。このことから3層上面を張り床面とすることも可能であろう。確かに3層は第37図にみるように平坦に造られているが、発掘調査中の所見では固く閉まっている印象はなかったので、積極的に主張することはできない。

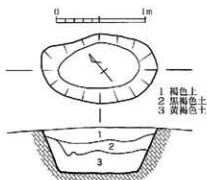
土坑 Y 3（第38図） 長軸約2.9m、短軸約1.6m、中央での深さ約0.3mの長楕円形を呈する土坑である。床面はほぼ平坦で、壁と床面の接点が角張っているの、人間が何らかの必要があって掘ったものであることは間違

いない。第38図の断面図に示しているように埋没状況が異常であり、どうしてこのようになるのか理解できない。表土直下に須恵器大甕の破片と思われる土器がまとまって見られたが、この土坑に属するものかどうか明らかにすることができなかったので、この土坑の使用時期は不明とするしかない。須恵器は内外面に通常のタタキメをもつもので、部分的にしか接合せず、図化できないものである。土坑 Y 4（第39図） 長軸約1.15m、短軸約0.9m、深さ約0.5mの不整形円形を呈する土坑である。埋没状況は明らかで、下層が一気に埋められ、中間層は一時期の地表面であったが、次第に沈下して窪み、上層が被さったものである。このような埋没状況は墓壇に多くみられるもので⁽¹⁰⁾、この遺構も墓壇とみてよいと思われる。遺物がなかったので、時期は不明である。

土坑 Y 5（第40図） 長軸約0.8m、短軸約0.65m、深さ約0.5mの不整形円形を呈する土坑である。埋没状況は中間層が厚い点に違いがあるが、Y 4の場合とほぼ同じで、墓壇に多くみられる埋没状況と



第39図 為弘遺跡土坑Y4
平面断面実測図



第40図 為弘遺跡土坑Y5
平面断面実測図

坦口縁にするものである。脚部はいずれもそれ程高くはならず、裾部は八字形に開く。また坏底部は所謂円盤充填法を採るものもみられる。

この時期の壺・甕の底部には特徴がある。8～13のように高台を連想させる顕著な上げ底で、11・12は底部に円盤を充填していることが明瞭に判る資料である。14は鉢に多くみられる底部。15は底部に直径約2cmの円孔をあけている。

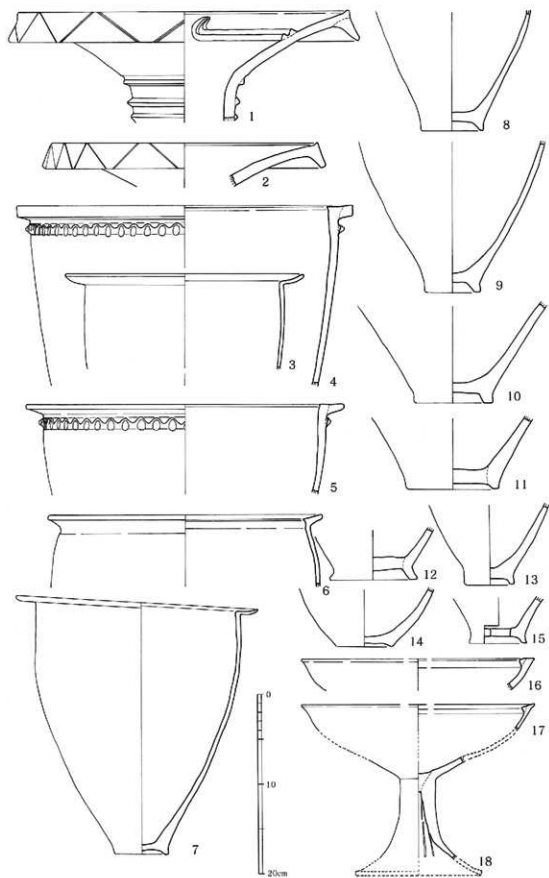
中期後半の器面調整は、全器種において丁寧に磨いてハケメを消しており、ハケメを残すものは極めて稀である。

袋状土坑及び周辺出土の遺物（第42図） 袋状土坑出土の土器で図上復元ができたのは甕形のもののみであった。甕はほぼ同一のタイプで、2は第41図6と同様に口縁下に稜線をつけて頸部を強調するかのようにつくりのもの、他は口縁部が前代に比べると、やや立ち上がり気味にほぼ水平に開くタイプである。また口縁部はまだ少し内湾するものもあるが、間もなくその特徴も消え失せる。この時期の甕の底部には特徴がある。1・4・5の底部はまだ上げ底ではあるが、分厚く裾端が張り出している。周防部では、短い期間にみられる特徴で、編年の目安となりうる。1・4は出土状況からも同一個体と思われるが、接合せず、図上でも完形には復元できない資料である。1は口径約18.5cm、器高

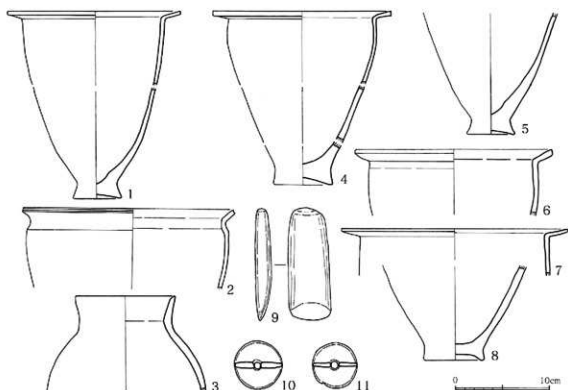
いえる。この土坑にも遺物はなく、時期は不明である。堅穴住居址と接しており、切り合い関係を注目して調査したが、わずかに離れており、前後関係を明らかにすることはできなかった。
住居址の遺物（第41図） 壺は、朝顔形に強く開く口頸部に垂下口縁を付けるものである。口唇面に鋸歯文を施し、筒形の頸部に3条程度の三角突帯を巻きつけるものは、弥生中期後半の周防部に通有にみられる壺形土器である。また大形のは口頸部の見込み部分に、流水形に2条の三角突帯を飾ることが多い。1は口径約38cm、2は約32cm。

甕は3種類がみられるが、いずれもこの時期、周防部で多くみられるものである。一つは比較的大形の甕に多いタイプ（4・5）で、直口口縁の外面に方形突帯を巻いて水平口縁をつくるものであるが、このタイプは決まって口縁直下に指頭による連続圧痕文を施した半月形の突帯を巻き付ける。6は突帯を持たない点で周防型とはいえず、より九州的色彩の強いものである。3・7は弥生時代を通じて引き継がれるタイプで、口縁部が水平に開き、かつ幾分内湾するのが中期後半の特徴といえる。7は図上で完形に復元できる資料で、口径約27.5cm、器高約28cmとなろう。

16～18は高杯である。この時期周防部には3タイプの高杯が知られている。一つは盤形の坏部を持つもの（第44図23）、つぎは直立する口縁端部の両側を肥厚させて平坦口縁にするもの、そして図のように、口縁端部の内側に三角突帯を貼りつけて平



第41図 為弘遺跡住居址出土土器実測図



第42図 為弘遺跡袋状土坑及び周辺出土遺物実測図

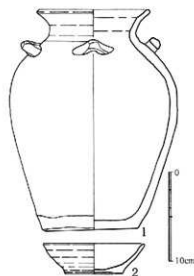
約20cm、4は口径約19cm、器高約18.5cmぐらいになるだろう。

器面調整はまだ丁寧な磨きによってハケメを消しているが、間もなくミガキが行われなくなるものと思われる。全体的にみてこれらの甕は、周防部では中期末に編年されている資料である。

3は3号墳の南西の包含層出土の直口壺の破片で、後期的な匂いがある。9は3号墳の北側包含層出土の石斧で砂岩製。10・11は2号墳周辺の表土除去中に発見した砂岩製の有孔円盤で、古墳に属する可能性もあるが、周防部では弥生遺跡に多くみられる遺物である。

2 古代の遺物（第43図）

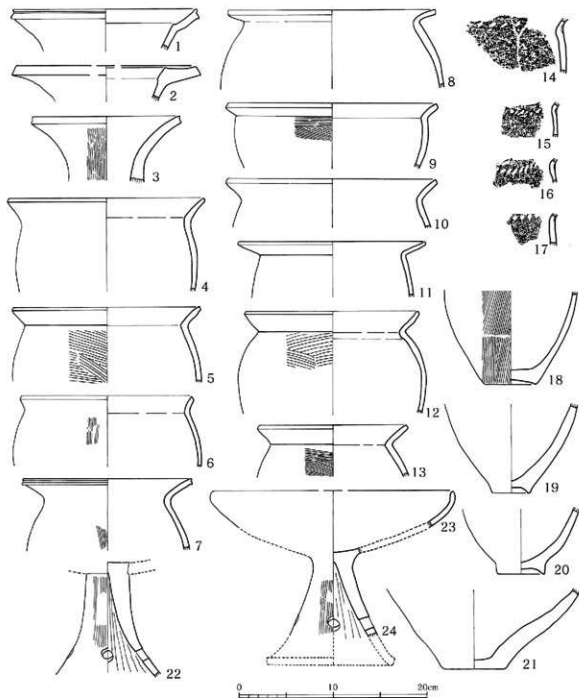
2号墳の玄室内埋土の上部で発見した遺物で、1は瓦質の四耳壺で、口径11.9cm、胴部最大径18.7cm、器高24.9cmである。2は土師質の坏で口径11.4cm、器高3.2cm。ともに11世紀前半の経塚関係資料と思われる。



第43図 為弘2号墳出土土器実測図

3 為弘西丘陵遺跡の土器（第44図）

我々の発掘作業中も、古墳のないところでは開発工事が着々と進行していた。たまたま工事現場を歩く機会があって、通り過ぎようとしたところ、押し出された土砂の中に土器片を発見した。慌てて丘陵に上ってみたが、地山さえ削り取られており、遺構はおろか包含層さえみられない状態であった。そこでやむを得ず、大型重機が削り出した土砂の中からできる限り多くの遺物を助け出すことにした。



第44図 為弘西丘陵表採土器実測図

コンテナ一杯分程度の土器片を採集したが、殆どが胴部の小破片で、図化できたのは第44図のものがすべてである。

1・2は脚の裾部かとも思われるが、周防部においては管見に類例がないので、壺の口縁部としたものである。1の口唇には特徴があり、周防部にも類例がある。2は平坦口縁の名残のバリエーションかとも思われるが、類例を知らない。1・2は器面を磨いているが、3は外面に細かいハケメを残す素口縁を持つ壺の口頸部である。

甕は所謂く字口縁を持つ単一タイプの土器である。8は磨かれている可能性があるものの、他の甕は大部分がハケメを残しているものである。図中ハケメを描いてないものは、器面の剥落が著しく、調整痕が読み取れない資料である。7は口唇に1条の擬凹線を巡らし、軽く磨いてはいるものの、細かいハケメがあちこちに残っている甕。12・13は粗いハケメを残す甕で、後期後半に多いタイプである。14~17は甕の口縁直下に施される連続刺突文で、ノ字状のものと円形のものがあがる点は周防部の通例といえ、中期後半に多くみられる。18~20は甕の底部と思われるが、依然としていくらか上げ底であるが、第42図1・4・5のように厚くはならず、裾端部も張り出さない。間もなく角が取れて丸底に近づく前の資料といえる。

22は差し込み式の脚部を持つ高杯。23・24は同一個体とは言い切れないが、中期的な高杯である。ともに磨かれてはいるもののハケメが残っている。

注(10) 山本一朗「土坑埋積類型」『周陽考古学研究所報』第4集 1989年

Ⅵ ま と め

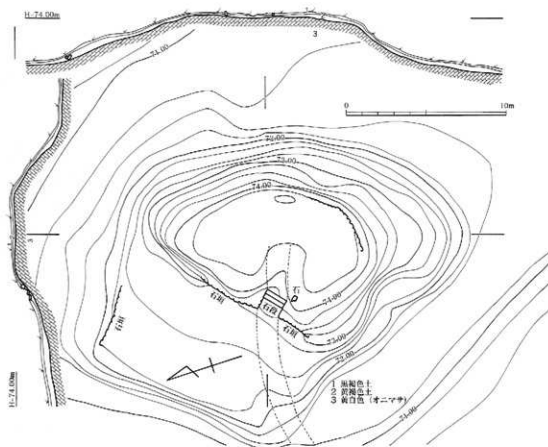
- (1) 為弘古墳群は、下松市大字生野屋宇白迫に所在する。下松という地名は「クダラツ」が訛ったものという説が有力である。古代には都濃郡の中心地であったと思われ、前方後円墳をはじめとする古墳群が周辺の丘陵上に散在する。為弘古墳群は旧山陽道の花岡宿場を見下ろす位置に在る。
- (2) 為弘1号墳は直径およそ10m、高さ2.5m程度に復元される円墳である。埋葬施設は南東に開口する横穴式石室で、大小の自然石を組み上げている。石室の平面プランは長方形両袖式で、全長約6m、玄室長約3.4m、中央部幅約1.7m、高さ約1.9m、羨道部幅0.96m。出土遺物には須恵器、装身具、鉄製品などがあり、土師器はみられなかった。須恵器は陶邑編年のⅡ型式5・6段階に該当するものと思われる。装身具には耳環、勾玉、切小玉のほか土製小玉が多数出土した。鉄製品には轡3個体分のほか、大刀・小刀、鏃、鏃・鋤先、鎌、斧などがある。
- (3) 為弘2号墳は確認された5基からなる古墳群では最高位に位置し、主墳ではないかと思われる。墳丘は楕円形を呈していたと思われ、長軸10m、短軸7m、高さ2.5m程度に復元され、背後に浅い周溝を巡らす。埋葬施設はほぼ南に開口する横穴式石室で、大小の自然石を組んだ長方形両袖式の玄室にやや開き気味の羨道を付ける。石室は全長6.3mで、玄室長約4m、幅約1.9m、高さも1.9m前後に復元され、羨道の幅は平均1mである。古墳関係の出土遺物は須恵器、土師器、装身具、鉄製品からなり、須恵器は陶邑編年のⅡ型式5・6段階に相当し、提瓶8個体が出土して目を引いた。心葉形をした一對の耳環は優品で、黄金の輝きを失っていない。その他の装身具としては勾玉・管玉・小玉がある。鉄製品には轡1式のほか大刀、鏃、鎌、斧、釘などが出土した。
- (4) 為弘3号墳は崖縁の斜面に築かれており、尾根筋を避けているのは、それなりの社会的規制が働いているものと思われる。墳丘の直径は約9m、高さは2.5m程度に復元される。3号墳も後ろに浅い周溝を巡らしている。埋葬施設は羽子板形の横穴式石室で全長約5.7m。不揃いな自然石を積み上げた玄室は長さ約3.6m、幅は奥壁部で約1.7m、玄門部では50cm程狭くなる。高さは約1.9mに復元される。羨道はやや開き気味で羨門部で幅約1mを測り、閉塞用の石材が残存していた。出土遺物は須恵器、土師器、耳環、鉄製品で玉類は発見できなかった。須恵器の坏類は殆どが小型化しており、陶邑編年のⅢ型式1段階に相当するものがある。また平瓶が4個体出土した。鉄製品は小刀、刀子、鏃、釘などであった。
- (5) 調査した3基の古墳の初葬の時期を供献された須恵器の編年から推測すれば、1・2号墳が6世紀後半に始まり、3号墳は7世紀の初めごろに下るものと思われる。
- (6) 2号墳の周辺で、弥生中期後半の小形隅円方形の竪穴式住居1軒と小形円形の袋状土坑1基、時期不明の土坑3基を発見した。為弘西丘陵遺跡は工事中偶然に発見したもののだが、遺構は既に削平されていた。これらの弥生土器は、中期末の袋状土坑の土器群を挟んで、その直前に竪穴住居址の土器群、その直後に為弘西丘陵遺跡の土器群という関係で、一連のものと考えられる。
- これらの弥生遺跡は高地性集落の範疇に属するであろう。
- (7) 2号墳は、古代には経塚としても利用されていたらしい。11世紀前半のものと思われる環と瓦質の四耳壺が出土した。

VII 旭山マウンドの調査

調査区の一帯西、末武扇状地に面した丘陵頂部に、墳丘状盛り上がりがあるので（第2図）、念のために調査をした。盛り上りの形状は、第45図のように長軸を約20°東に向けた楕円形で、長軸約20m、短軸は平均すれば約12m、高さはおよそ2.5mの重なり形をしていた。

長軸と短軸にそれぞれトレンチを設けて調査したところ、層序は単純で、黒褐色の表土の下に厚さ平均20cm程度の黄褐色の花崗岩の風化土があり、その下は岩盤状の風化花崗岩（オニマサ）であった。上部2層では、瓦や近代の陶器及び土師質土器片などを採集したが、古墳時代に属する遺物は検出できなかった。その後頂部平坦面を精査してみたが、墓壇などは全く検出できず、古墳ではないことが判明した。

このマウンドの頂部平坦面にはかつて小さな祠が置かれていた。そのために、近代以降、山を少し削って墳丘状のマウンドを造り出したものと思われる。



第45図 旭山マウンド平面断面実測図